近世平塚周辺の石工と石材流通 -石工銘と石材による試論

はじめに

では、 では宗教家の手による石仏については詳しいが、地域の石工については石材流通を含めて明らかではない。相模の石仏を俯瞰した松村雄介の研究では宗教家の手による石仏については詳しいが、地域の石工については石材にとどまっている。また、相模で活動した信州高さとに産地の状況の概説にとどまっている。また、相模で活動した信州高さい地域の石工の傾向や石材流通については触れていない。さらに、秋池宮は関東地方における墓石の石材分布から石材流通の動向を明らかにした武は関東地方における墓石の石材分布から石材流通の動向を明らかにした武は関東地方における墓石の石材分布から石材流通の動向を明らかにした武は関東地方における墓石の石材分布から石材流通の動向を明らかにした。 でい、当該地域を対象としたいわばミクロな視点での研究ではない。

主な石工とその作品を紹介する。を手がかりに、石工の活動と石材流通について考察してみたい。あわせて、を手がかりに、石工の活動と石材流通について考察してみたい。あわせて、そこで、本稿では平塚周辺に所在する近世石仏に刻まれた石工銘と石材

分析とならざるをえず、本稿は今後の研究に向けた考え方・素材の提示、限りほとんど見出せない。そのため、考察は限られた石造物を素材とした平塚市域ではわずか三二基である。石工銘のある石造物は、ごく例外的な平塚市域ではわずか三二基である。石工銘のある石造物は、ごく例外的な平塚市域ではわずか三二基である。石工銘のある石造物は、ごく例外的なで、調査報告書類で確認できる石工銘のある近世石造物は、平塚市・ただ、調査報告書類で確認できる石工銘のある近世石造物は、平塚市・

試論であることを予め断っておきたい。

早

田

旅

石工銘のある平塚市域の石造物の石材

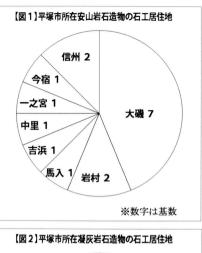
と石工の関係を考えてみたい。されている。そこで平塚市域の石造物の石材に注目して、石材ごとに石材が在・刻銘・形態などとともに、確認できるものについて石材情報が記録平塚の石仏を調べる会編『平塚の石仏』には、石造物の写真・スケッチ・

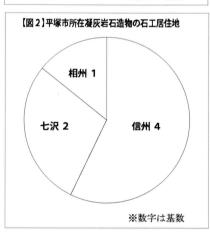
安山岩

状節理で割れた自然面が特徴の複輝石安山岩である。 根府川石は小田原市根府川から米神にかけて分布し、滑らかに弯曲した板が原と呼んでいたことから、近世初期に小松石と名付けられたという。小松原と呼んでいたことから、近世初期に小松石と名付けられたという。小松原と呼んでいたことから、近世初期に小松石と名付けられたという。近世平塚市域の石造物にみられる安山岩は、小松石・根府川石といった近世平塚市域の石造物にみられる安山岩は、小松石・根府川石といった

みると、大磯 (大磯町)・岩村 (真鶴町)・吉浜 (湯河原町)・馬入 (平塚市)・ものは、現在消失したものも含めて一六基である【図1】。これらの内訳を平塚市域におけるこれら安山岩の石造物のうち、石工の居住地を記した

平塚市博物館





がみられることが注目できる る 单 なかでも、 一宮町)・今宿 大磯に多いこと、 (茅ヶ崎市) 岩村 とい 0 吉浜といった石材の産出 た相模湾岸に多い 傾 向がうか 地の がえ 石

2 凝灰岩

伊勢原市日向・上粕屋の日向石も岩石学的には極めて類似し、 石材として多く用いられた。 である。 。銘文が不分明となるものが多い 産出する七沢石と呼ばれるものである。 近世平塚市域の石造物にみられる凝灰岩は、 般に繊細な彫を施す地蔵や観音に利用されるとともに、 ただし、 風化しやすく摩耗・剥離 ただ、 厚木市七沢の鐘 清川 村金翅 $\tilde{\sigma}$ 識別は困難 煤ヶ谷石や ケ嶽東麓 崩壊によ 庶民

市

信州の 国的に活動を展開し た高遠石工のことである。 現在消失したものも含めて七基であり、 - 塚市域における凝灰岩の石造物のうち、 石 工とは信濃国伊那郡高遠領 相模国では七沢や煤ヶ谷、 高遠石工は (長野県伊那市) 七世紀半ば以降に出稼ぎなどで全 信州・七沢がみられる。 石工 の居住地を記 日向に出稼ぎ、 を拠点に出稼ぎに来 したもの 逗留、 図2 は

> 【図3】平塚市所在安山岩石造物の分布率 金目 平塚宿·新宿 旭 13% 11% 須賀・馬入 土沢 11% 11% 八幡·四之宮 金田 4% 岡崎 4% 真土 神田 15% 豊田 中原 4% 南原 城島 3% 【図4】平塚市所在凝灰岩石造物の分布率

> > 神田 南原

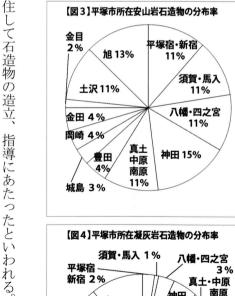
豊田 6%

城島 10%

岡崎

9%

金田 5%



旭11%

金目22%

土沢 21%

そのほ は御影石の鳥居で大坂の石工の手によるものである か、 平塚市域には刻銘のある花崗岩の近世石造物が (後述) 基ある。

れ <u>:</u>域にどのように分布・所在しているのであろうか。 工銘の有無に関わらず、 3 平塚市所在石造物の石材別分布 安山岩・凝灰岩それぞれの近世石造物は平 塚

造物は が優勢である。 較すれば、 注目できる【図3】。この比率は、 れらの分布比率をみると、 て示すものと指摘できると思われる。 亩 石材が安山岩と確認される石造物は三〇八基である(消失物も含む)。 金目・ (大神・田村) 兀 金田 安山岩の 八基であるのに対して、 また、 · 岡崎 の相模湾・相模川沿いの地域が四八%を占めること 石造物の多さを相模湾 土沢・旭の市域南西部域も 城島 平塚宿・平塚新宿・須賀・馬入・八幡・四之宮 豊田とい 次にみる凝灰岩の石造物の分布比率と比 凝灰岩石造物は五七基であり、 実数としても、 った市域内陸部・ 相模川 定の比率を占める 沿 この地域の安山岩 の地域的特徴とし 北西部には少な 安山岩 が

いという特徴も指摘できる。

めることにも目が引ひかれる。
次に、石材が凝灰岩と確認される石造物は四八七基である (消失物も含む)。これらの分布比率をみると、まず、相模湾・相模川沿いの地域がわずむ)。これらの分布比率をみると、まず、相模湾・相模川沿いの地域がわずむ。
ないことが注目される【図4】。
凝灰岩の石造物は、安山岩のかった金目が、
ないことにも目が引かれる。

状況から、石材流通に関してどのようなことが考えられるだろうか。さて、以上の平塚市域所在の近世石造物の石材ごとの石工居住地と分布

を積み出す廻船業が盛んであった。

を積み出す廻船業が盛んであった。

を積み出す廻船業が盛んであった。

を積み出す廻船業が盛んであった。

を積み出す廻船業が盛んであった。

を積み出す廻船業が盛んであった。

を積み出す廻船業が盛んであった。

を積み出す廻船業が盛んであった。

を積み出す廻船業が盛んであった。

へ出稼ぎ・移住して活動しており、七沢は七沢石の産地である。信州がみられるが、信州高遠石工は七沢・煤ケ谷・日向など凝灰岩産出地凝灰岩石造物の石工居住地も産出地との相関性がうかがえる。居住地に

次に、いま述べたことは、神奈川県における近世墓石石材について「七石造物の石材ごとの分布比率の意味を考えてみたい。まず、安山岩石造物が相模湾・相模川地域に多くみられることについては、その石材・石造物が相模湾・相模川地域に多くみられることについては、その石材・石造物が相模湾・相模川地域に多くみられることについては、その石材・石造物が相模湾とのは、七沢・目向の産地に近いとい。まず、安山岩石造物が出域によいることが関係あるのではないか。また、凝灰岩石造物が平塚では、いま述べたことを念頭に、石材流通の観点から平塚市域における

豆石材への依存率が上がっている」と述べた秋池武の指摘と符合する。高く、相模湾や江戸湾に向かうに従って下がり、これにかわって西湘~伊沢石を中心にみると、伊勢原台地や相模川流域ではこの石材への依存度が

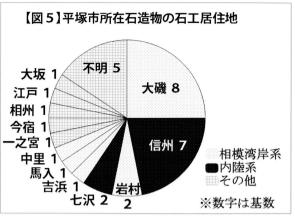
一石工居住地・石材分布から考える石材流通

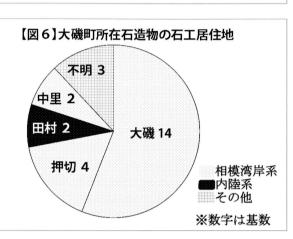
1 市町別石工居住地傾向

前章での検討を踏まえて、次に平塚市・大磯町・秦野市・厚木市に所在する石工銘の確認できる近世石造物について、市町別に石造物の石工居住地の傾向をみていきたい。なお、これらの市町を取り上げるのは、平塚市地の傾向をみていきたい。なお、これらの市町を取り上げるのは、平塚市地る。相模湾岸系とは相模湾岸に居住する石工で、前章の検討から安山岩を使用すると考えられる。内陸系とは七沢・日向・煤ヶ谷に住む石工で高を使用すると考えられる。内陸系とは七沢・日向・煤ヶ谷に住む石工で高きないのは、平塚市以外の調査報告書類に石材の記録がないためである。まり精確な分析のためには改めて石材の調査が必要である。

(1) 平塚市

における石材別の近世石造物数の割合は安山岩三〇八対凝灰岩四八七で、「その他」を除けば大磯など相模湾岸系がやや優位である。しかし、平塚市域の割合で存在する。平塚市域は地理的要因から、相模川・相模湾沿いを中心に相模湾岸系、北西部を中心に内陸系の石工の作品が、それぞれ同程度に流通したのではないかと思われる。ただ、石工居住地の割合を細かくみると、実際は一三対九で相模湾岸系がやや優位である。しかし、平塚市はとでは、東塚市に所在する近世石造物から確認できる石工居住地をみると【図5】、平塚市に所在する近世石造物数の割合は安山岩三〇八対凝灰岩四八七で、でおける石材別の近世石造物数の割合は安山岩三〇八対凝灰岩四八七で、の割合で存在する。





そこにはいま述べた問題があることを断っておきたい 凝灰岩が優位である 物の するものでないことを示している。 在地銘のある石造物から抽出される傾向が、 |系石工・凝灰岩優位) 〔相模湾岸系石工・安山岩優位〕 石 工. 一の居住地銘の割合から地域の石材流通につ (先述)。 とが逆になっている。 すなわち、 と、 そのため、 石材別石造物の 確認できる石工居住地 この 必ずしもそのまま実態を反 以下、 齟 割合が 歸は、 V 各市町における石 て推測を試みるが 数少ない 示す傾向 が 示す 石工 傾 分 向

れるのではないだろうか。系・内陸系それぞれの作品が、極端な差をみせずに流通する地域と考えらいた、平塚市域については、石材の割合から考えても、やはり相模湾岸

2) 大磯町

く、なかでも大磯の石工が過半を占める【図6】。大磯には多くの石造物に大磯町所在の石造物で確認できる石工居住地は圧倒的に相模湾岸系が多

よる石材流通が主流であったからと考えられる。 名を残す石工が存在 ったと考えられる。 【図7】秦野市所在石造物の石工居住地 大磯 3 不明 4 信州 2 大磯に相模湾岸系の石造物が多い 金子 1 (後述)、 相模湾岸系 煤ヶ谷 2 七沢 2 内陸系 その他 国府津 2 有力な石工が活動する石 ※数字は基数 【図8】厚木市所在石造物の石工居住地 河原口 1 不明 4 田村 1 お、 田代 2 0

煤ヶ谷 18

相模湾岸系

内陸系

※数字は基数

その他

(3) 秦野市

石工

の移住者であり

(後述)、

内陸系に分類した。

囲は、

村の

石工は信州

相模湾海運

ないだろうか。
と相模湾岸系の各石工の拠点と地理的に等距離にあることがその理由では系と内陸系が拮抗している。おそらく七沢・煤ヶ谷などの内陸系と大磯な系野市所在の石造物で確認できる石工居住地は、平塚市と似て相模湾岸

(4) 厚木市

ろう。なお、厚木の石工が相模湾岸系なのは、この石工が真鶴石工の系譜これは、七沢・煤ヶ谷といった内陸系石工の拠点に地理的に近いためであ厚木市所在の石造物で確認できる石工居住地は圧倒的に内陸系が多い。

工の

大拠点であ

七沢 2

厚木 4

信州 5

に連なるためである(後述)。

2 石材の推移

5 $1721 \sim 30$ $1731 \sim 40$ $1841 \sim 50$ $1851 \sim 60$ $1861 \sim 68$ $1671 \sim 80$ $1681 \sim 90$ $1751 \sim 60$ $1761 \sim 70$ $1771 \sim 80$ $1610 \sim 20$ $1641 \sim 50$ $1651 \sim 60$ $1661 \sim 70$ $1711 \sim 20$ $1741 \sim 50$ $1801 \sim 10$ $1691 \sim 1700$ $1701 \sim 10$ $1781 \sim 90$ $1791 \sim 1800$ $1811 \sim 20$ $1831 \sim 40$ $1821 \sim 30$ [図9] 平塚市所在石造物の石材推移 享保五年 (一七二〇) 前後 年には九基の地蔵が確認さ に流行した岩船地蔵信仰の 紀に入ると凝灰岩が多くな で安山岩が多いが、一八世 推移をみると、一七世紀ま 影響と考えられる。享保五 出も注目できるが、これは 〜享保五)の石造物数の突 一一~一七二〇年(正徳元 次に、石材別に比較して そのうち四基には の銘が確認できる。 岩岩

> ろう。 め、 る。 における近世墓石の は、 平塚市所在の石材推移にも有効と思われるが、一八世紀からの凝灰岩優位 材として七沢石を利用するようになったことをあげている。秋池の指摘は、 西湘〜伊豆石材が高価な石材になってきたこと、多くの庶民層は安価な石 の背景として墓石造塔が富裕庶民から財力の弱い庶民にも広がるなかで、 世紀初頭は、高遠石工が相模で活動を開始する時期であり、そのことがこ しはじめ、一九世紀には西湘~伊豆石材の墓石の割合を超えるという。 の逆転の背景にあると考えられる。また、これに関して秋池武が関東地方 高遠石工の活動開始に即応して凝灰岩優位の傾向があらわれたのであ 秋池によれば、 秋池の指摘する時期よりも早い。おそらく、 七沢石の墓石は一七世紀末~一八世紀初頭以降に増加 「西湘〜伊豆石材から七沢石への移行」を指摘してい 当地域は産地に直近のた

三 平塚周辺地域石造物の石工たち

に分けて紹介し、地域の石工の動向を追ってみたい。 最後に、平塚市周辺の石造物にみられる主な石工を相模湾岸系・内陸系

1 相模湾岸系

大磯宿畠中市郎兵衛 元禄一六年~安永二年(一七〇三~一七七三)の七大磯宿畠中市郎兵衛 元禄一六年~安永二年(一七〇三~一七七三)の七た作品は、前半は地蔵、後半は石塔が多い。 と刻銘されており、対のも含めて一四基もの作品が確認できる。刻銘の残されれら疑問のあるものも含めて一四基もの作品が確認できる。刻銘の残されれら疑問のあるものも含めて一四基もの作品が確認できる。刻銘の残されたりに、苗字は調査報告書により「畠中」「畑中」「富田」「富沢」と観音を表している可能性がある。居住地たりに、前半は地蔵、後半は石塔が多い。

35

30

25 20 15

逆転がみられる。一八

花崗岩



畠中市郎兵衛作の地蔵 岡崎紫雲寺 宝永3年(1706 宝永3年(1706)

畠中市郎兵衛の作品がみられなくなってから五○年後にみられる石工であ

文政八年 (一八二五) ~嘉永三年 (一八五〇) の二五年間

寺念仏碑に「信州石屋伊藤甚助」とあり苗字が知られる。

居住地は「大磯」「下町」「南下町」とあり、大磯宿南下町と考えられ

源兵衛の作品は九基確認できる。

大磯宿源兵衛

源兵衛作の日蓮菩薩塔

平塚妙安寺 天保2年(1831)

押切村(小田原市)伊藤吉五郎 文化一三年(一八一六)と嘉永七年、 名前がみられる 岩村青木安五郎 よる襲名の可能性がある。文化一三年の大磯町高来神社の敷石一式造営浄財 年紀の三作品に名がみられ、約四○年の時間幅があることから世代交代に 喜捨碑に「押切村石工棟梁伊藤吉五郎」とあり、棟梁であったことがわかる。 天保一三年(一八四二)の大島八幡神社境内鳥居にその 無

の弟子となり文化年間(一八〇五~一八一八)に厚木村上宿に開業したこ 厚木秋本忠次郎 に居住した公儀扶持人石屋善左衛門家のことであろうか。秋本家の銘のあ とに始まるという。小田原の青木家とは石工棟梁として板橋村(小田原市) る石造物は厚木市域に四基確認できる 厚木石工秋本家は、 初代秋本儀右衛門が小田原の青木家

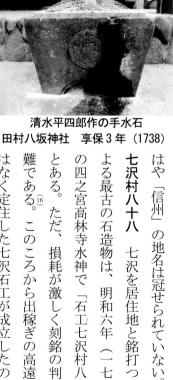
四)からと考えられている。はじめ煤ヶ谷に入り地元の石工に技術を伝え、 七世紀半ばからといわれるが、 内陸系の石工名は、まず高遠石工として現れる。高遠石工の出稼ぎは一 相模での活動は元禄期 (一六八八~一七〇

荒町村石屋甚助作」とある。享保四年(一七一九)の厚木市荻野新宿法界 造物が宝永七年(一七一〇)の厚木市愛名妙昌寺の題目塔で、 信州高遠領荒町村伊藤甚助

次いで七沢・日向の石切場を開発し、七沢石工・日向石工が成立したとい

平塚周辺地域で信州石工銘のある最も古い石

郡田村清水平四郎」、安永四年(一七七五)の大磯鴫立庵第二世庵主白井鳥酔追 えられ、明和六年(一七六九)の厚木市上依知妙伝寺題目碑には「石工大住 石屋清水平四郎」と名前がある。彼またはその子孫は田村に土着したと考 工で、田村八坂神社にある享保三年(一七一八)の手水石に「信州伊那郡 信州伊那郡石屋清水平四郎 平塚市域の石造物で最も早くみられる信州 善句碑に「田村 石工平四郎」と銘があり、



難である。このころから出稼ぎの高遠石工で とある。ただ、損耗が激しく刻銘の判読は困 の四之宮高林寺水神で「石工七沢村八十八」 よる最古の石造物は、明和六年(一七六九) 七沢村ハ十八 七沢を居住地と銘打つ石工に

うか。 はなく定住した七沢石工が成立したのであろ

幕末期になると大坂(大阪市)

石

3

大坂

造物が見られるようになる。 の石工の手による花崗岩 (御影石) 0)

大坂西横堀金屋橋東詰石屋源助・安兵衛・芳助 嘉永四年(一八五一)の紀年銘を持つ花崗岩(御影石)の鳥居がある。 こ 伊勢原市. 上粕屋の路傍に



(1851)坂西横堀金屋橋東詰 源助・安兵衛・芳助と刻銘されている。こ

れは大山阿夫利神社二の鳥居で、石工は大

(大阪市西区) の石屋

上粕屋路傍 村々の信心のある者が発起人となり再建が 朽ち果てたままになっていたため、 それらによると、建立は既存の木造鳥居が の鳥居には建立にいたる関連史料がある。

鳥居が「極上々之磨」で代金九三両、②大坂から浦賀までの運賃が二一両、 は岡山産の御影石が使用され、 費用の見積もりと輸送経路については、①

企図されたことによるという。また、石材

③浦賀での河岸上げ諸費用が四両、

④浦賀から須賀までの運賃が七両二分

ている。また、刻銘に「鳥居建方」として伊勢原片町鳶中とあり、鳥居は 部材で輸送され、 ⑥田村から七五三引村(上粕屋内の小名)までは村々の と船頭中へ祝儀が一両二分、⑤須賀から田村までの川船揚金一二両二分、 現地で組み立てられたことがうかがえる。さらに、 「信心持」とされ 8編

作、代金は八両二分だが「深彫」に直させたため、さらに一両二分かかっ 石屋久二郎

江戸神田筋違御門外 (東京都千代田区)

額は豆州小松石で、

なお、敷石は日向村石屋勝三郎の作と刻銘がある。鳥居には伊勢原・厚木・ ている。これら鳥居建立までの諸費用は計 一四九両二分と見積られている。

地域における大山信仰の篤さ、広がりがうかがえる 平塚の各市域の村々を中心に浦賀の人々まで一四○名以上の名前が刻まれ

とがわかる。 新三郎」の名が刻まれ、大坂炭屋町(大阪市中央区)の石工の作であるこ 大坂炭屋町御影屋新三郎 紀年銘をもつ花崗岩 また、鳥居の脇には付随して「鳥居寄進塔」 (御影石) 平塚市真田の真田神社に文久三年(一八六三) の鳥居がある。「石工大坂炭屋町みかげや が建てられてい

> さもうかがえる。 順であったことがうかがえる。また、 真田大工・煤ヶ谷石工・四ツ谷・羽鳥鳶方による組立てというルート・手 部材加工、③大坂から浦賀までの部材の輸送 (海路)、④浦賀から須賀まで の御影石の産地からの石材切り出し、②大坂での御影屋新三郎による鳥居 切り出しから鳥居建立までのルートがうかがえる。すなわち、 寄進が記録されている。ここから前掲上粕屋の鳥居の例を踏まえれば石の 平塚市域の一二ヶ村からの「鳥居持運人足助」、といった鳥居建立に際した などの鳶方による「職人工手間寄進」、②浦賀・須賀の商人・廻船問屋によ る。ここには、①真田大工、煤ヶ谷石工、四ツ谷 (藤沢市)・羽鳥 いることから、真田神社 の輸送(海路)、⑤須賀から村々の手による輸送 る浦賀から須賀までの「運賃水揚諸雑費寄進」、③中原村・豊田本郷など現 (当時は牛頭天王社) 広汎な地域の人々から寄進を受けて の信仰の篤さと信仰圏の広 (陸路)、 ③神社現地での ①中国地方 (藤沢市

盛況したが、明治期に廃業した石屋といわれる。(8) なお、御影屋新三郎は寛政期以降にみられ、 近畿・中国・四国・九州地方にもみられる。(望) 一時住吉大社の専属となり その作品は関東だけでな



御影屋新三郎作の鳥居 真田神社 文久3年(1863)



鳥居寄進塔 真田神社 文久3年(1863)

おわりに

物の分布動向については地理的要因でしか説明できなかった。今後、石材 も含めた悉皆調査と文献史料の発掘によるさらなる検証が必要となろう。 ように石工名がある石造物は全体のごくわずかであり、石材の流通や石造 以上、平塚周辺の石工と石材流通の動向を考察してみた。冒頭に述べた

位および浜野達也学芸員からご教示を賜った。記して謝意を表したい。 の講演をもとに成稿したものである。成稿にあたり石仏を調べる会会員各 本稿は二〇一四年度秋期イブニングミュージアムウィークにおける同名

註

- (1)松村雄介『相模の石仏―近世庶民信仰の幻想―』(木耳社、一九八六年)
- (2) 鈴村茂「七沢石」(厚木市教育委員会生涯学習課文化財保護係編『野だち の石造物』厚木市教育委員会、一九七二年)
- (3) 秋池武『近世の墓と石材流通』(高志書院、二〇一〇年)。
- (4) ただし、伊勢原市については悉皆調査的な報告書がないため、 料が増える可能性がある。 今後検討材
- 年六月一三日付け七沢村石工四郎兵衛の石代金受取覚書(柳川起久雄家文書鳥居と思われる石材の送り状(後欠、上野洋一家文書三五七号)と、安政三(5) 管見の限りでは平塚市博物館寄託文書には、本稿で紹介する真田神社の 二二六号)があるのみである。
- (6) 本稿作成にあたっては平塚市博物館編『平塚の石仏・改訂版1~9』(平 二〇〇一年)・前掲註(2)『野だちの石造物』・伊勢原市教育委員会社会教育 調查報告書1~7』(大磯町教育委員会、一九八四~一九九五年)・秦野市教 タをもとにした。また、平塚市外については、大磯町教育委員会編『石造物 塚市博物館、一九九八~二〇一四年)および、石仏を調べる会の補足調査デー 育委員会生涯学習課編『秦野の石仏1~4』(秦野市教育委員会、一九九八~

委員会編『伊勢原市史 査団編『伊勢原市内の大山道と道標第二版』伊勢原市教育委員会、二〇一二年) 課編『伊勢原の庚申塔』(伊勢原市教育委員会、 別編民俗』(伊勢原市、一九九七年)、再発見大山道調(伊勢原市教育委員会、一九八八年)・伊勢原市史編集

- (7) 以下、本稿における石材の岩石学的説明および概要は、森慎一「平塚市 祈りと願い』(平塚市博物館、二〇一四年)による。 自然と文化』二四号、二〇〇一年)・平塚市博物館『平塚の石仏―3058の での石材調査における国内産石材の種類と特徴」(『平塚市博物館研究報告
- 二〇〇五年)。 (8)長野県高遠町教育委員会編『再発見!高遠石工』(ほ おずき 書
- 湾・相模川の水運については、拙稿「近世相模川・相模湾水運における須賀(9) 真鶴町編『真鶴町史 通史編』(真鶴町、一九九五年)。なお、近世の相模 村の位置」(『平塚市博物館研究報告自然と文化』三六号、二〇一三年)参照。
- (10) 前掲註(3) 秋池著書。
- (11)前掲註(7)『平塚の石仏―3058の祈りと願い』・福田アジオ『歴史探 索の手法―岩船地蔵を追って』(筑摩書房、二〇〇六年)。
- (12) 前掲註(3) 秋池著書。
- (1) 厚木市文化財協会編『厚木の民俗1 生業』(厚木市教育委員会、一九八一年)。 ただし、前掲註(2)『野だちの石造物』では、真鶴の青木家の系統を継ぐとする。
- (15) 前掲註 (2) 『野だちの石造物』。 (4) 内田哲夫『小田原地方商工業史』(夢工房、一九八九年)。
- (17)佐々井信太郎編『二宮尊徳全集』八巻(二宮尊徳偉業宣揚会、一九三○年) (16)「八十八」の刻銘は前掲註(2)『野だちの石造物』による。
- 一一二七頁。山田恒雄「大山阿夫利神社二の鳥居復元由来記 (上)・(中)・(下)・
- (18) 飛田範夫「江戸時代の大坂の石屋」(『ランドスケープ研究』六四巻五号、(余録)」(『かながわ風土記』一六八~一七一号、一九九一年)。 二〇〇一年)。
- (19) 二○一四年一一月現在、ウェブ上の検索のみで、御影屋新三郎の銘のある 元年(一八〇一)愛媛県八幡浜市金毘羅神社鳥居・安政三年(一八五六)宮石造物として、天明四年(一七八四)岡山県瀬戸内市若宮八幡宮狛犬・享和 安政四年(一八五七)和歌山県田辺市道分け石が確認できた。 崎県日向市立磐神社立岩大明神碑·安政三年(一八五六)大阪市住吉大社灯籠

【表1】平塚・大磯・秦野・伊勢原・厚木の石工名のある近世石造物

		1-35 77 1932	*1	<i>5</i> 7 ///	13-71107		石のある近世石垣物		
No.	地域名	所在地	種別名	石材名	和曆	西暦	石工名	石工住所	同一人物
1	須賀	海寶寺境内	阿弥陀三尊	安山岩	元禄4年	1691	石屋 田中仲右門		
2	徳延	路傍	地蔵	安山岩	元禄 16 年	1703	磯下町 畠中市郎兵衛	大磯	市郎兵衛
3	岡崎	紫雲寺	地蔵	安山岩	宝永3年	1706	作者大磯畑中市郎兵衛	大磯	市郎兵衛
4	愛名	妙昌寺	題目碑		宝永7年	1710	信州高遠荒町村 石屋甚助作	信州高遠	伊藤甚助
5	七沢	七沢観音寺	手水鉢		正徳2年	1712	信州高遠領 忠兵衛 長五郎 甚助 与茂之丞 磯右	信州高遠	伊藤甚助
6	岡崎	満願寺門前	地蔵	安山岩	享保2年	1717	衛門 源左衛門 伊左衛門 甚五兵衛		
7	田村	八坂神社	手水石	安山岩	享保3年	1717	作者 大礒下町 市[兵]衛 信州伊那郡 石屋清水平四郎	大磯 信州伊那郡(のち田村)	市郎兵衛?
8	荻野新宿	法界寺	念仏碑	女田石	享保4年	1719	信州石屋 伊藤甚助		平四郎
9	東大竹	大宝寺					□右衛門	信州	伊藤甚助
10	大磯	楊谷寺	地蔵立像 地蔵		享保 5 年 享保 10 年	1720 1725	石屋大磯 富沢市郎兵衛	信州	
11	北矢名	長昌院跡	一字一石塔		享保 12 年	1725	右座入機 晶状印刷共解	大磯	市郎兵衛
12	大山	大山佐藤織部氏宅	地蔵		享保 16 年	1731	运列而逐往 石工护膝及石闸门 小他武共闸 友右衛門	信州高遠 (信州高遠)	伊藤友右衛門 伊藤友右衛門
13	根坂間	寶珠院	名号塔·廻国塔	安山岩	享保 21 年	1736	大磯町 作者 石屋 富多市[良]	大磯	市郎兵衛
14	国府本郷	真勝寺	出羽三山供養塔	X P-0-LI	元文元年	1736	作者石工 大磯下町 富多市兵衛	大磯	市郎兵衛?
15	国府新宿	宝積院	大日如来坐像		元文2年	1737	石工 大磯下町 富多市郎兵衛	大磯	市郎兵衛
16	小嶺	宗圓寺	題目塔	凝灰岩	元文4年	1739	信州伊那郡高遠村 石屋又八郎	信州高遠	1112112414
17	平塚宿	要法寺門前	寺号塔	安山岩	寛保元年	1741	大磯北下町石工 富田市郎兵衛門 同 嘉右ヱ衛門	大磯	市郎兵衛?
18	大磯	大運寺	名号塔		延享2年	1745	石屋 市良兵衛	(大磯)	市郎兵衛
19	大磯	慶覚院墓地入口	秩父坂東供養塔		延享3年	1746	石工 右田市郎兵衛	(大磯)	市郎兵衛
20	堀山下	日立製作所前	大山道標		寛延4年	1751	相州大磯下町 石屋市良兵衛	大磯	市郎兵衛
21	寺山	通寺	六地蔵		宝暦7年	1757	大磯北下町 石屋市良兵	大磯	市郎兵衛?
22	愛名	妙昌寺	題目碑		明和2年	1765	信州高遠住 石工 弥市	信州高遠	
23	西小磯	西小磯東老人憩の家	宝篋印塔	Mett e	明和4年	1767	大磯 北下町 石工 市郎衛	大磯	市郎兵衛?
24	四之宮	高林寺	水神	凝灰岩	明和6年	1769	石工七沢村 八(十八)	七沢	
25	上依知	妙伝寺	題目碑		明和6年	1769	石工大住郡田村清水平四郎 石工大工 田村 西田郎	田村	平四郎
26	大磯	鴫立庵	庵主杉坂百明句碑四世	ets.i.iii	明和7年	1770	石大工 田村 平四郎	田村	平四郎
27 28	中原 依知山際	日枝神社 長福寺	鳥居	安山岩	明和7年	1770	相劦岩村 石屋沢右衛門	岩村	
29	大磯	大運寺	観音 名号塔		安永元年 安永2年	1772	河原口 石工 前場直治	河原口	
30	大磯	鴫立庵	を 主白井鳥酔追善句碑		安永 4 年	1773 1775	石屋 市良兵衛 田村 石工平四郎	(大磯)	市良兵衛
31	土屋	路傍	宝篋印塔		安永7年	1778	信州高遠之石工與[惣]	田村 信州高遠	平四郎
32	大磯	鴫立庵	芭蕉句碑		安永9年	1780	石工 孫三郎	16州向建	
33	中原	慈眼寺	題目塔	凝灰岩	天明元年	1781	相州住 石工 新八 □善	相州	伊藤新八?
34	四之宮	大念寺	十王	安山岩	天明4年	1784	細工 石屋 多吉	TH711	け飛納 八:
35	下糟屋	若宮神社	鳥居	AMA	寛政2年	1790	石工信州住 伊藤新八寿当	信州	伊藤新八
36	飯山	金剛寺	宝珠持地藏立像		寛政2年	1790	石工当国田代邑住 大貫門左衛門鋪寓	田代	大貫門左衛門鋪寓
37	上依知	上依知神社左側	秋葉山信仰碑		寛政 4	1792	煤ヶ谷 石工 久五郎	煤ヶ谷	山田久五郎
38	田村	八坂神社	不動明王·道標	凝灰岩	寛政5年	1793	石工[市]五郎	//K/ H	pa pa y Carrel
39	厚木幸町	宝安寺	地蔵		寛政6年	1794	信州 高遠北原村 石匠北原藤右衛門	信州高遠	
40	渋沢	路傍	道標		寛政8年	1796	石工松田元八		
41	下荻野	法界寺	石灯籠		寛政 10 年	1798	石工当国煤ヶ谷山田久五郎	煤ヶ谷	山田久五郎
42	下川入	源養寺	念仏碑		寛政 12 年	1800	石工煤ヶ谷山田久五郎	煤ヶ谷	山田久五郎
43	飯山	金剛寺	舟形光背延命地蔵立像		享和3年	1803	煤ヶ谷石工 山田久五郎□富	煤ヶ谷	山田久五郎
44	入野	成願寺	地蔵	凝灰岩	文化2年	1805	信刕伊那郡高遠領荒町邑 石工 北原清左衛門長英	信州高遠	北原清左衛門
45	上依知	井上氏宅南	秋葉山信仰碑		文化2年	1805	石工 煤ヶ谷 山田久吾郎	煤ヶ谷	山田久五郎
46	飯山	金剛寺	延命地蔵立像		文化2年	1805	石工 当国田代邑住大貫門左衛門鋪寓	田代	大貫門左衛門鋪寓
47	南矢名	弘法山山頂	石祠台石		文化3年	1806	石工 市右ヱ門	高遠荒町村(日向石工)	市右衛門
48 49	日向	諏訪神社	手水鉢		文化3年	1806	信州伊那郡高遠領北原村石工北原与兵衛	信州高遠	北原与兵衛
50	日向	日向鍛代家墓地	墓石		文化 4 年没	1807		高遠荒町村(日向石工)	市右衛門
51	船子 林	本盛寺門前林神社	石坂供養塔 鳥居		文化5年	1808 1809	媒ヶ谷住 石工山田徳治郎政昤 煤ヶ谷石工 川田亀吉義知	煤ヶ谷	wm#+
52	日向	日向鍛代家墓地	墓石		文化6年没	1809		煤ヶ谷 信州藤沢荒町村(日向石工)	川田亀吉
53	中原	大松寺	六地蔵	安山岩	文化8年	1811	今宿村 石工 源三良	今宿村	
54	日向	日向鍛代家墓地	墓石	AH41	文化8年没	1811	勝蔵	荒町村(日向石工)	
55	日向	日向鍛代家墓地	墓石		文化10年没	1813	半左衛門(父·荒町)	信州藤沢荒町村(日向石工)	
56	上粕屋	上粕屋神社入口	由緒碑		文化 11 年	1814	市右衛門	高遠	市右衛門
57	上粕屋	上粕屋神社入口	由緒碑		文化 11 年	1814		高遠	THE PART OF
58	上粕屋	上粕屋神社入口	由緒碑		文化 11 年	1814	清左衛門	高遠	北原清左衛門
59	上粕屋	上粕屋神社入口	由緒碑		文化 11 年	1814	彦八	信濃国高遠	
60	上粕屋	上粕屋神社入口	由緒碑		文化 11 年	1814	七内	信濃国高遠	
61	山下	八幡神社	鳥居	安山岩	文化 12 年	1815	吉浜住 石工 六三郎	吉浜	
62	高麗	高来神社	敷石一式造営		文化 13 年	1816	押切村石工棟梁 伊藤吉五郎	押切	吉五郎
			浄財喜捨碑					14.60	
63	大磯	茶屋町公民館	子育地蔵		文化 14 年	1817	武藤熊五郎造		武藤熊五郎
64	大磯	大運寺	徳本念仏等	Mary market	文政元年	1818	石工 武藤熊五郎		武藤熊五郎
65 66	岡崎	駒形神社	手水石	凝灰岩	文政2年	1819	石工兵右エ門	/ tab = 2/51	111 Ac -1-
66	飯山	山岸よりの峠	道標		文政3年	1820	石工 亀吉	(煤ヶ谷)	川田亀吉
67	千村	泉蔵寺	結界石		文政4年	1821	国府津石工半治郎	国府津	半治郎
68	日向	日向鍛代家墓地	墓石		文政 4 年没	1821	卯七抱こと俗名向山民弥	信州(日向石工)	
	千村	泉蔵寺	地蔵		文政7年	1824	国府津石工半治郎	国府津	半治郎
69	-141	宝蓮寺	万霊塔		文政7年	1824	石工善右衛門	X 1 (m) 10	
69 70	蓑毛		Loc		文政8年	1825	石工 源兵衛	(大磯南下町)	源兵衛
69 70 71	大磯	鴫立庵	石橋			100-	THE LLANGERY OF THE STREET		
69 70 71 72	大磯 東小磯	鴫立庵 三宅氏屋敷	家訓碑	775,1. ILI	文政 11 年	1828	石工 片瀬平治郎 同 源兵衛	(大磯)	源兵衛
70 71 72 73	大磯 東小磯 平塚宿	鴫立庵 三宅氏屋敷 妙安寺	家訓碑 日蓮菩薩塔	安山岩	文政 11 年 天保 2 年	1831	大磯宿 石工 源兵衛	(大磯) 大磯(南下町)	
69 70 71 72	大磯 東小磯	鴫立庵 三宅氏屋敷	家訓碑	安山岩	文政 11 年	1831 1831		(大磯)	源兵衛

77	口片	广 #3 5th 51.	エルル		T/0 0 /F	1000	rifer Hat this	<i>I</i> ⇒ 111	
	日向	白髭神社	手水鉢		天保3年	1832	富茂蔵	信州	JUNE P. C. MC
78	日向	白髭神社	手水鉢		天保3年	1832	与兵衛	信州	北原与兵衛
79	高麗	高来神社	常夜燈		天保4年	1833	押切村石工 弥三郎	押切	News are office
80	大磯	旧円城院墓地	弘法供養塔		天保5年	1834	A STATE OF THE STA	(大磯南下町)	源兵衛
81	日向	日向鍛代家墓地	墓石		天保5年没	1834	富蔵(伊藤)	高遠北原村(日向石工)	
82	七沢	浅間社下	石坂寄進碑		天保6年		煤ヶ谷金超 石工大矢市右衛門外 11 名	煤ヶ谷	大矢市左衛門
83	岡崎	浮島稲荷	鳥居	凝灰岩	天保7年		信州伊奈村高遠□□村 石工 藤原□藏	信州高遠	藤原幸蔵
84	日向	日向鍛代家墓地	墓石		天保7年没	1836	弥右衛門	高遠水上村(日向石工)	
85	千村	泉蔵寺	徳本上人像		天保 11 年	1840	七沢村 石工 庄右ヱ門勝重	七沢村	
86	恩名	三島神社	石鳥居		天保 12 年	1841	当国下煤ヶ谷住石工大矢市左衛門	煤ヶ谷	大矢市左衛門
87	三田	三田	大六天社		天保 12 年	1841	石工 ススガヤ 川田竹次郎	煤ヶ谷	
88	上荻野	松石寺	弘法大師像		天保 12 年?	1841	下煤ヶ谷 石工 大矢市左衛門	煤ヶ谷	大矢市左衛門
89	大島	八幡神社	鳥居	安山岩	天保 13 年	1842	岩村 石工 青木安五郎	岩村	
90	日向	日向鍛代家墓地	墓石		天保 13 年没	1842	広蔵(伊藤)	信州高遠荒町村(日向石工)	
91	東小磯	妙大寺	題目宝塔		天保 14 年	1843	南下町 石工 源兵衛	(大磯)南下町	源兵衛
92	平塚宿	春日神社	狛犬		天保 14 年	1843	江戸高砂町河岸 石工 井筒屋千太郎	江戸高砂町	2002 (111)
			敷石供養塔						
93	城所	貴船神社	石坂供養塔	安山岩	天保 15 年	1844	信州高遠 黒澤邨 石工 藤原幸蔵	信州高遠	藤原幸蔵
94	大磯	熊野神社	正徳供養塔		弘化2年	1845	石屋 源兵衛	(大磯南下町)	源兵衛
95	横内	御霊神社	敷石供養塔	安山岩	弘化2年	1845	石工 小宮万藏	()(WXIH) MJ)	がパラマー中川
96	大磯	旧円城院墓地	宝篋印塔	女田石	弘化3年	1846	石工 源兵衛	(大磯南下町)	源兵衛
97	日向	日向鍛代家墓地	墓石		嘉永元年	1848	伊左衛門		(水)大洋
								高遠弥勒村(日向石工)	
98	日向	日向鍛代家墓地	墓石		嘉永元年	1848	嘉兵衛	信州藤沢村(日向石工)	had of the
99	上大槻	菅原神社	灯籠		嘉永3年	1850	大磯宿 石工源兵衛	大磯(南下町)	源兵衛
100	上粕屋	路傍	鳥居	花崗岩	嘉永 4 年	1851	大坂西横堀金屋橋東詰石屋源助·安兵衛·芳助	大坂西横堀金屋橋東詰	
101	七沢	鐘ヶ嶽参道	勢至菩薩像		嘉永5年	1852	石工 宗兵衛		
102	下糟屋	普済寺	六万人塔		嘉永6年	1853	信州高遠住石工伊藤宇吉	信州高遠	
103	金田	妙純寺	題目碑		嘉永6年	1853	生国信州高遠 一之宮 太吉 石工 清七	信州高遠・一之宮・江戸本石町	X.
105	3至口	发 少形已 寸	題 口 4年		新八 0 午	1000	石工 江戸本国町一丁目 長次郎	后州向逐•一之昌•江尸本有可	
104	厚木	厚木神社	手洗鉢		嘉永6年	1853	秋本忠次郎重信	厚木	秋本忠次郎
105	大磯	楊谷寺	手洗石		嘉永7年	1854	石工 吉五郎	(押切)	吉五郎
106	真土	路傍	稲荷	安山岩	安政元年	1854	一之宮 石工 赤羽太吉郎	一之宮	
107	城所	浄心寺	地蔵	凝灰岩	安政3年	1856	石工 信州住人 幸蔵作	信州高遠	藤原幸蔵
	79071	.,		,,,,,,			棟梁六左衛門 工人浅五郎 春吉 寅吉 佐太良 徳	117711-422	74,771 1 775
108	上荻野	松石寺	□華塔		安政3年	1856	治良 忠兵衛 栄吉 作右衛門 直吉 作治良 重左衛	煤ヶ谷	大矢六左衛門
							門 鉄五郎 亀吉		
109	上吉沢	妙覚寺	地蔵	凝灰岩	安政5年	1858	石工 七沢村 山田勝蔵	七沢	THE LA
110	小蓑毛	路傍	鳥居		安政6年	1859	信州タカトウ 石屋清兵衛	信州高遠	
111	七沢	七沢観音寺前	観音		安政6年	1859	石工 惣蔵	HI / HI MALE	
112	岡津古久	古祥寺	他阿上人名号塔		万延元年	1860	七沢村 石工 四良[兵衛]	七沢	
113	北矢名	菅原神社	手洗石		文久元年	1861	煤ヶ谷住 石工守屋太工門	煤ヶ谷	守屋太ヱ門
114	北矢名	菅原神社	灯籠		文久元年	1861	煤ヶ谷住 守屋太工門	煤ヶ谷	守屋太工門
115	上荻野	荻野神社			文久元年		煤ヶ谷石工 大矢六左衛門		
	平塚宿		手水鉢	-0 100				煤ヶ谷	大矢六左衛門
116									
117		春日神社	灯籠	安山岩	文久2年		石工馬入嘉吉	馬入	Of the sector
	土屋	子の神神社	鳥居	安山岩	文久2年	1862	石工 脇定五郎	中里村	脇定五郎
117 118	土屋 七沢	子の神神社 足ヶ久保鳥居場	鳥居 石坂供養塔	安山岩	文久2年 文久2年	1862 1862	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名)	中里村 七沢・煤ヶ谷	脇定五郎
118 119	土屋 七沢 真田	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社	鳥居 石坂供養塔 鳥居		文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年	1862 1862 1863	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎	中里村 七沢・煤ヶ谷 大坂炭屋町	脇定五郎
118 119 120	土屋 七沢 真田 曽屋	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年	1862 1862 1863 1863	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義蔵	中里村 七沢・煤ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村	脇定五郎
118 119 120 121	土屋 七沢 真田 曽屋 及川	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年	1862 1862 1863	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義蔵 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川	中里村 七沢·媒ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 媒ヶ谷	脇定五郎
118	土屋 七沢 真田 曽屋	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年	1862 1862 1863 1863	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義蔵	中里村 七沢・煤ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村	脇定五郎
118 119 120 121 122	土屋 七沢 真田 曽屋 及川	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年	1862 1862 1863 1863 1863	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義蔵 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川	中里村 七沢·媒ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 媒ヶ谷	脇定五郎
118 119 120 121 122 123	土屋 七沢 真田 曽屋 及川 棚沢	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居 常夜燈	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年	1862 1862 1863 1863 1863 1863 1864	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤口義巌 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工山形水郎 石工 勝五郎 石工 秋本忠次郎	中里村 七沢·媒ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 媒ヶ谷	脇定五郎
118 119 120 121 122 123 124	土屋 七東田 屋川 水屋 上川 一川 一川 一川 一川 一川 一川 一川 一川 一川 一川 一川 一川 一川	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮 曽屋神社内稲荷神社	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居 常夜懸 手洗石 鳥居	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 4 年	1862 1862 1863 1863 1863 1863 1864	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤口義巌 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工山形水郎 石工 勝五郎 石工 秋本忠次郎	中里村 七沢・媒ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 煤ヶ谷 煤ヶ谷	秋本忠次郎
118 119 120 121 122 123 124 125	土屋 七 真 屋 川 開屋 屋 川 開屋 田 沢 屋 田 沢	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮 曽屋神社内稲荷神社 沖若宮八幡宮 生沢鷹取	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居 常夜燈 手洗石 鳥居	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 4 年 文久 4 年 慶応元年	1862 1862 1863 1863 1863 1863 1864 1864	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義巌 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工 勘次郎 石工 勝五郎 石工 秋本忠次郎 中里村 石工 脇定… 同安五… 同角… 同□次…	中里村 七沢・媒ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 媒ヶ谷 煤ヶ谷 厚木 中里村	
118 119 120 121 122 123 124 125	土屋 七次 真曽屋 展川 棚曽屋川 屋田沢 屋田沢 柳川	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮 曽屋神社内稲荷神社 沖若宮八幡宮 生沢鷹取 路傍	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居 常夜橙 手洗石 鳥居 鳥居	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 4 年 文久 4 年 慶応元年 慶応 2 年	1862 1863 1863 1863 1863 1864 1864 1864 1865	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義巌 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工 勘次郎 石工 勝五郎 石工 秋本忠次郎 中里村 石工 脇定… 同安五… 同角… 同□次… 金子村 石工礒右衛門	中里村 七沢・媒ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 煤ヶ谷 煤ヶ谷 早木 中里村 金子村	秋本忠次郎
118 119 120 121 122 123 124 125 126	土屋 七沢 真田 曽川 棚曽 田沢 曜 田 上 荻 町 上 荻 野	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮 曽屋神社内稲荷神社 沖若宮八幡宮 生沢鷹取 路傍 上荻野深堀	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居 常夜祝石 鳥居 鳥居 地神塔 地蔵像	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 4 年 文久 4 年 慶応元年 慶応 2 年	1862 1863 1863 1863 1863 1864 1864 1865 1866	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義巌 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工 勘次郎 石工 秋本忠次郎 中里村 石工 脇定… 同安五… 同角… 同□次… 金子村 石工礒右衛門 下煤ヶ谷村石工城所権右衛門嘉音	中里村 七沢・媒ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 煤ヶ谷 煤ヶ谷 厚木 中里村 金子村 煤ケ谷	秋本忠次郎
118 119 120 121 122 123 124 125 126 127	土屋 七裏曽別 一個屋 一個屋 一個一個 一個一個 一個一個 一個一個 一個一個 一個一個	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮 曽屋神社内稲荷神社 沖若宮八幡宮 生沢鷹取 路傍 上荻野深堀 日向薬師参道	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居 常夜遊 馬居 鳥居 地蔵像 道標	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 4 年 文久 4 年 慶応 2 年 慶応 2 年	1862 1863 1863 1863 1863 1864 1864 1865 1866 1866	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義蔵 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工 勝次郎 石工 勝五郎 石工 秋本忠次郎 中里村 石工 脇定… 同安五… 同角… 同□次… 金子村 石工礒右衛門 下煤ヶ谷村石工城所権右衛門嘉音 石工 当村 吉兵衛	中里村 七沢・媒ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 煤ヶ谷 煤ヶ谷 厚木 中里村 金子村 煤ヶ谷 目向村	秋本忠次郎(脇定五郎)
118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128	土屋 七裏曽屋川 棚屋屋川 棚屋 田沢 中生柳 荻向 上依知 上依知	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮 曽屋神社内稲荷神社 沖若宮八幡宮 生沢鷹取 路傍 上荻野深堀 目向薬師参道 若宮神社	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居 常夜歷 手洗居 鳥居 地蔵 地蔵標 地蔵標 馬頭観音	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 4 年 文久 4 年 慶応元年 慶応 2 年	1862 1863 1863 1863 1863 1864 1864 1865 1866	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義巌 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工 勘次郎 石工 勝五郎 石工 秋本忠次郎 中里村 石工 脇定… 同安五… 同角… 同□次… 金子村 石工礒右衛門 下煤ヶ谷村石工城所権右衛門嘉音 石工 当村 吉兵衛 厚木 石工 秋元忠次郎	中里村 七沢・媒ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 媒ヶ谷 爆ヶ谷 厚木 中里村 金子村 媒ヶ谷 目向村 厚木	秋本忠次郎 (脇定五郎) 秋本忠次郎
118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128	土屋 七真	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮 曽屋神社内稲荷神社 沖若宮八幡宮 生沢鷹取 路傍 上荻野深堀 目向薬師参道 若宮神社 南金目神社	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥夜遊 手洗居 鳥居 地蔵標 地蔵標 馬頭展	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 4 年 文久 4 年 慶応 2 年 慶応 2 年	1862 1863 1863 1863 1863 1864 1864 1865 1866 1866	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 高橋方次郎 藤□義巌 埃ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工 勘次郎 石工 務五郎 石工 秋本忠次郎 中里村 石工 脇定… 同安五… 同角… 同□次… 金子村 石工礒右衛門 下煤ヶ谷村石工城所権右衛門嘉音 石工 当村 吉兵衛 厚木 石工 秋元忠次郎 大磯石工源兵衛	中里村 七沢・煤ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 煤ヶ谷 煤ヶ谷 厚木 中里村 金子村 煤ヶ谷 目向村 厚木 大磯(南下町)	秋本忠次郎 (脇定五郎)
118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129	土屋 七裏曽屋川 棚屋屋川 棚屋 田沢 中生柳 荻向 上依知 上依知	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮 曽屋神社内稲荷神社 沖若宮八幡宮 生沢鷹取 路傍 上荻野深堀 目向薬師参道 若宮神社	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居 常夜歷 手洗居 鳥居 地蔵 地蔵標 地蔵標 馬頭観音	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 4 年 文久 4 年 慶応 2 年 慶応 2 年	1862 1863 1863 1863 1863 1864 1864 1865 1866 1866	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義巌 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工 勘次郎 石工 勝五郎 石工 秋本忠次郎 中里村 石工 脇定… 同安五… 同角… 同□次… 金子村 石工礒右衛門 下煤ヶ谷村石工城所権右衛門嘉音 石工 当村 吉兵衛 厚木 石工 秋元忠次郎	中里村 七沢・媒ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 媒ヶ谷 爆ヶ谷 厚木 中里村 金子村 媒ヶ谷 目向村 厚木	秋本忠次郎 (脇定五郎) 秋本忠次郎
118 119 120 121	土屋 七真	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮 曽屋神社内稲荷神社 沖若宮八幡宮 生沢鷹取 路傍 上荻野深堀 目向薬師参道 若宮神社 南金目神社	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥夜遊 手洗居 鳥居 地蔵標 地蔵標 馬頭展	安山岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 4 年 文久 4 年 慶応 2 年 慶応 2 年	1862 1863 1863 1863 1863 1864 1864 1865 1866 1866	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 高橋方次郎 藤□義巌 埃ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工 勘次郎 石工 務五郎 石工 秋本忠次郎 中里村 石工 脇定… 同安五… 同角… 同□次… 金子村 石工礒右衛門 下煤ヶ谷村石工城所権右衛門嘉音 石工 当村 吉兵衛 厚木 石工 秋元忠次郎 大磯石工源兵衛	中里村 七沢・煤ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 煤ヶ谷 煤ヶ谷 厚木 中里村 金子村 煤ヶ谷 目向村 厚木 大磯(南下町)	秋本忠次郎 (脇定五郎) 秋本忠次郎 源兵衛
118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131	土屋 七具	子の神神社 足ヶ久保鳥居場 真田神社 元町 及川八幡宮 大神宮 曽屋神社内稲荷神社 沖若宮八幡宮 生沢鷹取 路傍 上荻野深堀 目向薬師参道 若宮神社 南金目神社 大磯闖こいずみ	鳥居 石坂供養塔 鳥居 不動尊 鳥居 常夜挺 手洗居 鳥居 地蔵標 地蔵像 馬頭居 水神塔	安山岩 花崗岩	文久 2 年 文久 2 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 3 年 文久 4 年 文久 4 年 慶応 2 年 慶応 2 年	1862 1863 1863 1863 1863 1864 1864 1865 1866 1866	石工 脇定五郎 七沢村石工中 煤ヶ谷石工(11名) 石工 大坂炭屋町 みかげや新三郎 七沢石工 髙橋万次郎 藤□義藤 煤ヶ谷石工山田藤兵衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工 田藤東衛安耀 同苗貫免 安達 夫川 煤ヶ谷石工 勘次郎 石工 秋本忠次郎 中里村 石工 脇定… 同安五… 同角… 同□次… 金子村 石工礒右衛門 下煤ヶ谷村石工城所権右衛門嘉音 石工 当村 吉兵衛 厚木 石工 秋元忠次郎 大磯石工源兵衛	中里村 七沢・煤ヶ谷 大坂炭屋町 七沢村 煤ヶ谷 厚木 中里村 金子村 煤ヶ谷 目向村 厚木 大磯(南下町) (押切)	秋本忠次郎 (脇定五郎) 秋本忠次郎 源兵衛 吉五郎

出典:平塚市博物館編『平塚の石仏・改訂版 1 ~9』 / 大磯町教育委員会編『石造物調査報告書1~7』 / 秦野市教育委員会編『秦野の石仏 1~4』 / 『史市教育委員会経正学習 課文化財保護係編『野だちの石造物』 / 伊勢原市教育委員会社会教育課編『伊勢原の庚申塔』 / 伊勢原市史編集委員会編『伊勢原市史別編民俗』 / 再発見大山道調査団編『伊勢原市内の大山道と道標 第二版』
